

4 アンケート結果の活用

アンケートの結果は同じ学年を受け持つ複数の教員で把握し、スクールカウンセラー等の専門家の見立ても活用し、いじめ問題への取組みに生かします。

アンケートの結果は、次のように活用します。

(1) 児童・生徒との信頼関係の構築

当然のことながら、アンケートで全てを把握することはできません。大切なのは、児童・生徒との信頼関係です。したがって、アンケートの結果を踏まえつつ、授業中や昼食時、休み時間等に児童・生徒と意識して対話をしたり、個人日記等で児童・生徒と悩みについて対話するなど、児童・生徒が教職員に本当の気持ち、悩みなどを打ち明けることができるよう、信頼関係づくりに取り組むことが大切です。

(2) 教育相談の実施

アンケートの結果を踏まえ、児童・生徒に対して個別に教育相談を行います。アンケート結果を示して、学校全体の客観的な状況を示しながら個別に教育相談を行うことで、児童・生徒の困っていることや悩みを引き出し、早期対応を図ります。

(3) 教職員のチームによる対応

教職員同士がいじめ問題について話し合う場面において、アンケートの結果を材料として活用し、学年内での共通理解や部活動の顧問と担任との情報共有等を行うなど、日ごろから教職員同士が相談できる雰囲気を作り、チームで対応できる体制を整えます。

(4) 児童・生徒による主体的ないじめ問題への取組み

アンケートの結果を材料として、児童・生徒が今自分たちの学校で起きていることを自分たちの問題と受け止め、いじめ問題について話し合いをもつ場面を設定し、児童・生徒の主体的な取組みにつなげることが重要です。

(5) 保護者や地域の応援団を増やす

アンケートの結果をふまえた学校の指導方針を保護者や地域に発信し、共通理解のもとに協力を依頼するなど、学校の実情に合わせて、様々な場面で活用するよう工夫することが大切です。

(6) 定期的なアンケートの実施

アンケートは少なくとも学期に 1 回実施するなど、定期的な実施をすることで、いじめの起こる頻度や、問題の深刻度がどのくらい変化したかを比較分析することができ、いじめが起きにくくなるような取組みに役立てることができます。

(7) 児童・生徒理解のために活用

実施したアンケートは、その集団のいじめの状況について把握する貴重な資料となります。児童・生徒理解を図るためにも、把握した状況については次の学年に伝え、児童・生徒指導に生かすことが必要です。なお、個人情報の取扱いにも配慮が必要です。

< 「気になること・いやなことはありませんか」項目別アンケート結果の活用例 >

アンケート項目 1～4 について

- ・ 相手に心理的苦痛を与える絶対に許されない人権侵害です。「ある」に回答した児童・生徒がいた場合には、個別の教育相談を行い、その事実が特定できた段階ですぐに対応します。 P.10 <いじめの初期対応について> 参照
- ・ さらに、「いじめ問題」について学級活動の話し合いの議題とするなど、児童・生徒が自分たちの問題と受け止め、主体的に「いじめ問題」について考え、自ら活動することができる場を設定します。

アンケート項目 5～15 について

- ・ 「ある」に回答した児童・生徒がいた場合には、個別の教育相談を行い、その事実が特定できた段階ですぐに対応します。 P.10 <いじめの初期対応について> 参照
- ・ いじめの中には、犯罪行為として取り扱われるべきと認められるものが含まれます。5～15 項目については、早期に警察に相談・通報の上、警察と連携した対応をとることが必要な場合もあります。また、全員と個別に面談を行うことが必要な場合もあります。
- ・ 個々のいじめ事案が、「犯罪行為として取り扱われるべきと認められるもの」に当たるか否かについては、いじめの態様や加害児童・生徒の状況等によって、的確に判断することが必要であり、平素より、どのような行為が刑罰法規に該当するかについて、教職員の理解を深めておくことが必要です。
- ・ 犯罪行為として取り扱われるべきか判断に迷う場合も含め、積極的に警察に相談できるよう、日ごろから学校と警察との緊密な連携体制を構築しておくことが必要です。

それぞれの項目について、犯罪行為となる可能性のあるものは次のとおりです。

- 5 変なあだなをつけられたり、変な呼び方で呼ばれたりする
- 6 いじられたり、からかわれたり、悪口を言われる
- 7 いやなことを言われたり、ばかにされたりする
「名誉毀損」「侮辱」（刑法第230条、231条）
- 8 かるくぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、けられたりする
- 9 ひどくぶつかられたり、たたかれたり、けられたりする
「暴行」（刑法第208条）「傷害」（刑法第204条）
- 10 役割や当番などをおしつけられたり、かばんを持たされたりする
- 11 おどすようなことを言われたり、危険なことをさせられたりする
- 12 服を脱がされるなど、はずかしいことをさせられる
- 13 メールやネット上のサイト、携帯電話などで、変なことが書かれている
「強要」（刑法第223条）「強制わいせつ」（刑法第176条）
- 14 自分のものをかくされたり、乱暴に扱われたり、こわされたりする
- 15 お金やものをとられたり、おごらされたりする
「窃盗」（刑法第235条）「器物損壊等」（刑法第261条）「恐喝」（刑法第249条）

参考：「早期に警察へ相談・通報すべきいじめ事案について（通知）」文部科学省平成25年5月16日

< アンケート項目の例 >

「気になること・いやなことはありませんか」で示した項目以外にも、次のような項目が考えられます。

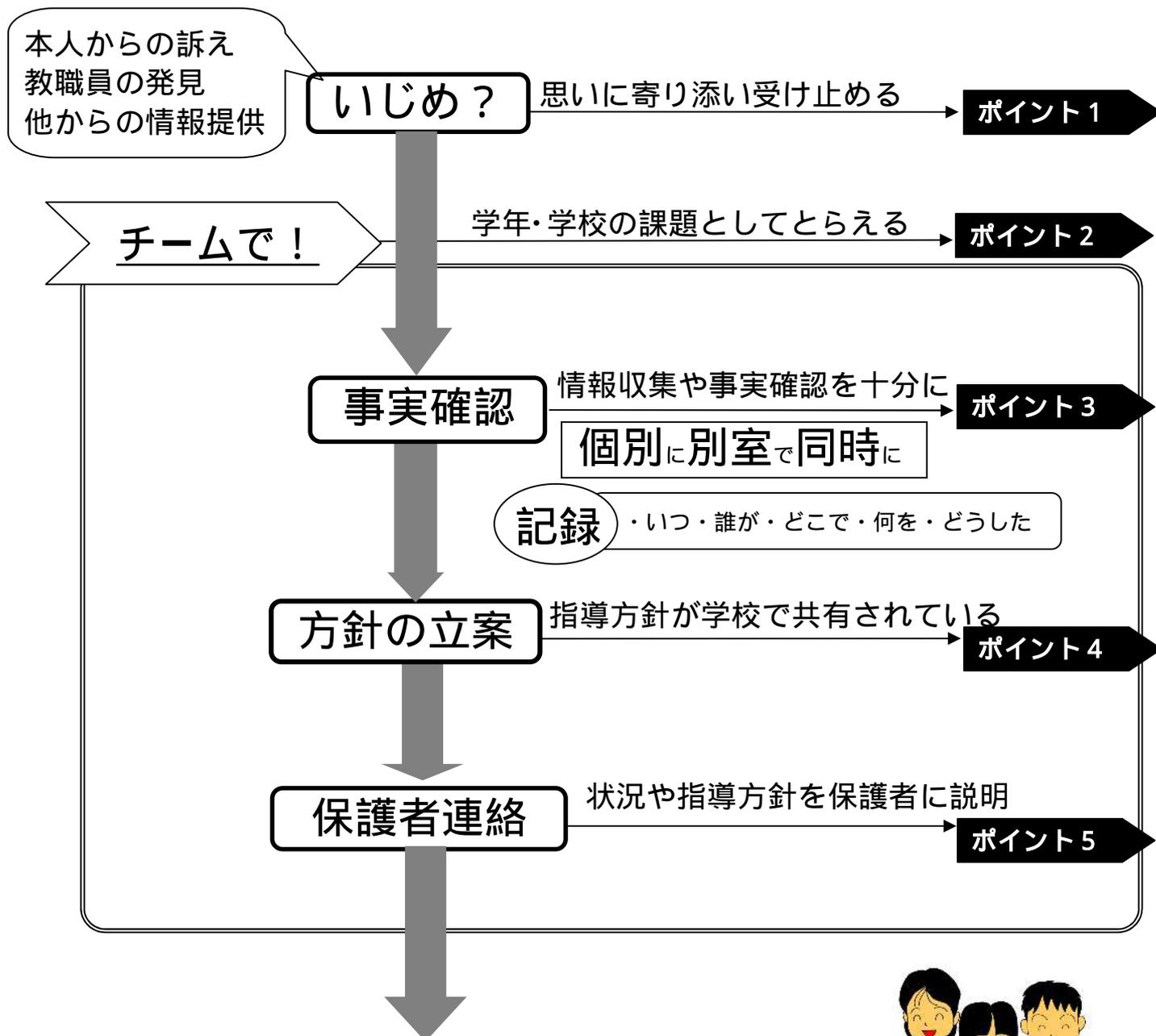
- ・ つくえやかべに変なことを書かれる
- ・ トイレや人のいないところで複数に囲まれる
- ・ 紙に悪口が書いてある
- ・ 自分のものがなくなることがある
- ・ プロレスなどの技をかけられる

その他、学校の状況に合わせて、項目の設定について教職員で検討することが大切です。

<いじめの初期対応について>

学校が「いじめではないか」ととらえたときに、次のような手順で対応することが考えられます。特に重要となる **ポイント** については次頁以降に示しています。

いじめ初期対応のながれ



今後の指導方針の確認 翌日へ



ポイント1 ▶ いじめ？

児童・生徒の不安、保護者の
思いに寄り添い受け止める

いじめかな？と思ったらまずその子に関わって、しっかり受け止める。

いじめを受けている児童・生徒本人からの訴えや、保護者からの訴えがあった場合は、十分に聞き取る。

不安やつらさをしっかりと受け止めることが、安心感や信頼感につながる。

いじめを受けている児童・生徒を「絶対に守る」こと、そのためには校内の先生方と一緒に対応することを伝える。

関係者がチームを作り、すぐに、いじめを受けている児童・生徒の心のケアをする。

ポイント3 ▶ 事実確認

情報収集や事実確認を十分に行う

チームで事実確認の方法と役割分担を確認して行う。

< 事実確認において留意すること >

- ・ 時間帯 聞き取りを行うのは原則として学習権を侵害しない時間帯に（休み時間・放課後など）
- ・ 場所 目立たない場所で
- ・ 加害・被害ともに事実をしっかり聞く
- ・ 必ず記録する

ポイント4 ▶ 方針立案

指導方針が学校で共有されている

立案にあたって、次のことに留意する。

< 被害児童・生徒 >

- ・ 本人の安全確保、心のケアと継続的な見守り
- ・ 本人や保護者とのこまめな情報交換

< 加害児童・生徒 >

- ・ その行為は人権侵害であるという毅然とした指導
- ・ 本人が抱える思い、問題行動の背景や要因を探る
- ・ 保護者へのこまめな連絡により家庭と学校の指導の連携を図る

このできごとを通して、教育として「子どもたちに何を学ばせたいか」

ポイント2 ▶ チームで！

起きている問題を
学年・学校の課題としてとらえる

「まずは伝えること！」

いじめではないかととらえた時点で一人で抱え込まず、周囲に相談する。

日頃からのチームをもとに、事案に応じて関係者がチームを作る。

(例：担任、学年、児童指導担当、養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー)

< チームのメリット >

- ・ 多様な情報が得られる
- ・ いろいろな視点から物事を分析できる
- ・ 構成メンバーの持ち味が活かせる

中心的な役割（リーダー）を決める。

聞き取りの留意点！

一度目の聞き取り
一度目の聞き取りを、時間を決め分担して個別に別室で同時に実施
(リーダーは待機)

集約
決められた時間になったら、集まって、聞き取った内容をリーダーに報告
(このときに聞き取りを行っている児童・生徒はその場に待機させる)

再確認
食い違う点について再度聞き取る

ポイント5 ▶ 保護者連絡

現在の状況や指導方針について説明

直接、保護者へ説明。家庭訪問。電話。
事実についての説明には、推測や個人的な解釈は交えない。

保護者の話はていねいに受け止め、安心感が持てる話し方をする。

随時経過を報告することを約束する。

学校だけでなく、家庭での指導について

「一緒に考えましょう」という姿勢で！
保護者との信頼関係づくりへつながる。



今後の指導方針の確認 翌日へ

情報収集・事実確認の例

一度目の聞き取り

対象者氏名 Aさん (加害者 <u>被害者</u> ・目撃者) 該当に			
記録者 山田 聞き取り日時 月 日 13:00～13:10 場所 図書準備室			
いつ	どこで	だれが	どんなことを
月 日 から	登校時 教室	Bさん Cさん Bさん Cさん	待ち合わせをしているが、先に行ってしまう。 話しかけても無視する。

対象者氏名 Bさん (加害者・ <u>被害者</u> ・目撃者) 該当に			
記録者 川上 聞き取り日時 月 日 13:00～13:10 場所 図工準備室			
いつ	どこで	だれが	どんなことを
月×日	放課後	Aさん	何もしていない。

再確認



集約 時間を決めてリーダーに報告。このときに聞き取りを行っている児童・生徒はその場に待機させる

再確認（下線は再度の聴き取りで得た内容を加筆）

対象者氏名 Aさん (加害者・ <u>被害者</u> ・目撃者) 該当に			
記録者 山田 聞き取り日時 月 日 13:15～13:25 場所 図書準備室			
いつ	どこで	だれが	どんなことを
月 日 から	登校時 教室	Bさん Cさん Bさん Cさん	待ち合わせをしているが、先に行ってしまう。 話しかけても無視する。 <u>Cさんに話しかけるとBさんが連れて行ってしま</u> う。

加筆

対象者氏名 Bさん (<u>加害者</u> ・被害者・目撃者) 該当に			
記録者 川上 聞き取り日時 月 日 13:15～13:25 場所 図工準備室			
いつ	どこで	だれが	どんなことを
月×日	放課後	Aさん	家に帰ってからAさんから電話があり「やっぱり遊べない」と言われた。
月 日	登校時	自分	だからCさんに「Aさんとは話さないほうがいいよ。」と言い、登校時に離れて歩いた。

加筆

被害児童から訴えがあった場合の指導方針の例

被害児童・生徒	<ul style="list-style-type: none"> 被害児童・生徒の思いをていねいに聞き取る。「困っていること」を聞く。 被害児童・生徒の安全を守る見守り体制をつくる。
加害児童・生徒	<ul style="list-style-type: none"> 加害児童・生徒に対し、被害児童・生徒が「困っていること」（またはそう思われる可能性のあること）をすぐにやめるように指導する。 その行動をとった理由や気持ちを聞く。 加害児童・生徒の行った行動は絶対にすべきでないことを指導する。 「どうすべきだったか」という謝罪の気持ちをつくり、今後は「どうすればよいか」という前向きな姿勢をつくる。
周囲	<ul style="list-style-type: none"> これまでのいじめに関するアンケートをチェックし、本事案に関する記載やその他気になる記載について再確認する。
保護者	<ul style="list-style-type: none"> 被害及び加害児童・生徒の保護者への説明内容（客観的事実・指導方針・現状・家庭での支援の依頼）の確認 家庭訪問（又は電話）で保護者に説明

<いじめの早期発見に向けて>

学校生活では様々な場面で、子どもたちからのサインをキャッチすることができます。アンケートの結果をもとに、「今週は、こういう視点で子どもたちを見ていこう」等、学校や学年で児童・生徒を見る視点を話し合い、振り返りを行うなど、取組みを工夫することができます。

【登校時・朝の会】

遅刻・欠席（ぎりぎりの登校）
表情が暗く元気がない・無理に明るい
あいさつの声が小さい（しない）・いつもと違う
体調不良を訴える

【授業中】

忘れ物が増えた
成績や学習意欲が低下する

【休み時間】

一人で過ごしている
遊びと称して友達とふざけあっているが、表情がさえない
トイレ等にこもっていることが多い
ケガや傷が多い、服を汚す
教員にまとわりつく、寄ってくる

【昼食時】

食欲がない

【帰りの会・下校時】

なかなか下校しようとならない
あわてて下校する

【部活動】

欠席が増える
参加意欲が低下している

【学校生活全般】

保健室によく行くようになる
弱いものにあたる
ある子の所にゴミが置かれている。
衣服に足跡などがついている

